

# 沈約の「修竹彈甘蕉文」について

稀代麻也子

## はじめに

沈約と「隱」との関係は深い。「後漢書」逸民伝の後をうけて「宋書」で初めて「隱逸」という名称を用いて伝をたてたし、「郊居賦」「八詠詩」などは、隱逸への憧憬を前面に押し出した作品として有名である。<sup>①</sup>象徴的なのは、梁の武帝によってつけられた諡までもが「隱」だったことであらう。

沈約独特の隱逸論は、「宋書」隱逸伝の序で展開されている。要約すれば、沈約は常識的には隱者の典型とされる許由や巢父などの在り方を「荷蓀之隱」とみなし、心をのびやかにできる「賢人之隱」よりも劣るものとしたということになる。沈約にとって「事は人に違ふに止まる」という巢父や許由のような在り方は偽善的なものに過ぎず、「義は自らを晦ますを深しとす」という在り方こそが理想とすべき隱者であった。<sup>②</sup>

小論で取り上げる「修竹彈甘蕉文」という作品は、一読したところ沈約の隱逸思想とは関係無さそうに見える。題名が示すように滑稽味を帯びた作品だし、話の大筋も「甘蕉が伸び過ぎたから刈るべきだ」というものだからだ。ところが、この文の後半部分には、話の流れとは不釣り合いな内容が差し挟まれている。雑草取りの陳情書に、馮衍・嵇康・嚴君平という隱逸に関係深い人物が唐突に登場し、これによって「修竹彈甘蕉文」は單純明快な論旨の文章たり得なくなっている。筆者は、文の流れをわざわざ停滞させているかのようなこの部分にこそ、沈約の寓意が隱されていると考える。

小論の目的は、「宋書」を始めとして色々な作品で沈約が主張している「賢人之隱」が「修竹彈甘蕉文」の基底にも認められることを証明することにある。

## 1、「修竹彈甘蕉文」

先ず「修竹彈甘蕉文」の文章を実際に読み進めながら考えていくことにする。

### ①甘蕉の実態を訴える

渭川長兼淇園貞幹臣修竹稽首。臣聞、芟蕘蘊崇、農夫之善法、無使滋蔓。翦惡之良図、未有蠹苗害稼、不加窮伐者也。

切尋蘇台前甘蕉一叢、宿漸雲露、荏苒歲月、擢本盈尋、垂蔭含文。階緣寵渥銓衡百卉。而予奪乖爽、高下在心。每叨天功、以為己力。

風聞籍聽、非復一塗。猶謂愛憎異說。所以挂乎蔽網。

《渭川の長官にして淇園の貞幹を兼ねている私、修竹が申し上げます。私は雑草を刈りとってつみあつめるのは農夫のよき業であり、雑草をはびこらせないようにするよい方法だと聞いております。大切な苗を駄目にしたり作物に悪影響を与えることがないならば、徹底的に抜いてしまうという極端な方法を取るまでもありません。

（そのように考える私は、抜くべきか否かを見極めるために、）自ら蘇台の前の甘蕉を見て参りました。もともと水分豊富などあった上に長い間ほらっておいたものですから、根本から一尋（八尺）、影は一丈（十尺）にもなってしまうていました。天子様の寵愛をよいことにあらゆる草

に対して評価を下し、まるで吏部郎気取りです。賞罰も本来の在り方とは違い、進退の権利をほしいままにしております。天の采配で物事が進んでいるのに、自分の力で世の中がまわっているのだと勘違いしています。

官吏の非行を弾劾する匿名の風聞によって判断してみますと、甘蕉がもはや私達とは途を異にしましたことがわかります。やはり思いますに、愛憎についての主張が私達とは違うのです。これが厳しく取り締まるべき理由です。》

文中の「風聞」とは、御史中丞に差し出して官吏の非行を弾劾する書のことであり、匿名性が保証されている。<sup>③</sup>

沈約は「文選」李善注によれば、永明八年（四九〇年）に御史中丞になった。彼はこの官にあった時に「奏彈王源」を書いて、その中での風聞の用いられ方も、基本的に「修竹彈甘蕉文」と同じだ。王源に関する「風聞」があり、そこで御史中丞が調査に乗り出した結果「風聞と符同せり」、だから奏彈する、というものだ。

「渭川」の沿岸には「史記」貨殖列伝に「渭川千畝竹」ともあるように、竹を多く産する所があるという。「修竹」を擬人化しているとすれば、彼が「渭川長」であることは、極めて自然だ。また、ここは太公望呂尚が釣りをしたとい

う「史記」齊太公世家にある話でも有名で、この言葉を使うことによって、「修竹」が王佐の才をもっているということが密かにアピールされる。勿論、そこに「詩経」邶風・谷風の「涇は渭を以て濁る」という渭川の清いイメージを加味すれば更にこの作品での「修竹」のキャラクターが鮮明になるだろう。なお、最初の部分を福井佳夫氏は「長く淇園を兼ねし貞幹の臣修竹」と読み下し、渭川の問題には言及していない<sup>④</sup>。なるほど、殆どのテキストは「長兼」から始まる立場をとっているが、陳慶元が「沈約集校箋」（浙江古籍出版社、一九九五年）一〇七頁において指摘するように、「四庫全書」所収の「漢魏六朝百三家集」では、「兼」の前に「渭川」の二文字を入れている。「四庫全書」がこの二文字を加える立場をとったのは、「修竹弾甘蕉文」が弾文という公式の文書のパロディーであることを考えれば妥当だといえる。「の長官とを兼任する」とした方が「長」が浮かないからである<sup>⑤</sup>。

このように、まさに竹のごとく清く正しく筋の通っている「修竹」が弾劾する相手は、淇園にはびこる「甘蕉」である。

甘蕉は「南州異物志」によれば「草類なれども之を望むに樹の如く、株の大なる者は一畝余り、葉長は一丈、或は

七、八尺余り、……、此の蕉に三種有り。」（『芸文類聚』卷八十七菓部下・芭蕉）という大きく育つ草で、甘いのを特徴とするもの、実が牛乳に似ているもの、綵になるもの、の三種類にわかれるという。また、「寒ければ毒無く、……、熱ければ毒なれども亦効あり。」（『重修政和証類本草』卷十一甘蕉根注引唐本草余注）という性質を持つ菓草であるともいう。沈約自身も「修竹弾甘蕉文」の後半で甘蕉がもともとは菓草であるといっている。ところが今や他の草に害毒をなすようになり、是非とも除かねばならない雑草に墮してしまった。また、沈約が「詠甘蕉詩」（『芸文類聚』卷八十七菓部下・芭蕉）で描写するのは、鼻つまみものとなす状態の甘蕉であるようだ。

抽葉固盈丈

葉を抽きんづること固に丈に盈ち、

擢本信兼囀

本を擢きんづること信に囀を兼ねぬ。

流甘拚椰実

流甘は椰実を拚ひ、

弱縷冠絺衣

弱縷は絺衣に冠たり。

馬鹿でかい葉、一抱えもある茎。椰子の実よりはるかにどぎつい臭い、ばさばさとした繊維は葛の衣も及ばない。勿論、現在伝わっているこの四句だけでは「詠甘蕉詩」の制作意図ははっきりせず、詩全体で結果として甘蕉を褒めることになるかもしれない。そうだとすると、甘蕉の香りを

褒め、葛よりも良質の繊維がとれる甘蕉を称えている可能性もある。しかし、少なくとも「修竹弾甘蕉文」においては、芬馥たる香りを放つ現在の甘蕉は、弾劾されるべき対象である。

甘蕉のイメージが「修竹弾甘蕉文」と最も近いのは、庚信の「擬連珠」四十四首その三十八に登場するものだろう。

卷施不死 卷施の死せざるは、

誰必有心 誰か必ず心有らん。

甘蕉自長 甘蕉自ら長じ、

故知無節 故に節無きを知る。

(※卷施↓草の名。心を抜いても枯れないという。)

甘蕉で示されるのが作者自身であるか否かの違いはあるが、節操なく蔓延る者に対する嫌悪を表すという点では同じである。

## ②風聞の具体例

今月某日、「有台西階沢蘭萱草、到園同訴。『自称雖慚杞梓、頗異蒿蓬、陽景所臨、由来無隔。』」

今月某日、「巫岫斂雲、秦樓開照。乾光弘普、罔幽不暘。而甘蕉攢葦布影、独見障蔽、雖処台隅、遂同幽谷。」

《今月某日、私修竹の所へ次のような風聞が届きました。「台の西の階の沢蘭と萱草がやってきて一緒に訴えるには、『私たちは決して杞梓ほど良材で有能な存在ではないけれど、普通の雑草である蒿蓬とは違うんだから、太陽が射している時には、ちゃんと光を浴びたいのです』と訴えたとのことでした。」

今月某日、また私の所へ次のような風聞が届きました。「巫山の洞穴は雲をおさめていたし、秦楼にも燦々と光が注いでいました。日光はあまねく行き亘り、薄暗い所なんてあろう筈ありませんでした。それなのに甘蕉が茎を集めて影を作った為に台全体がすっぱり覆われ、台の端に到るまですべて、深い谷にいる様に薄暗くなってしまいました。」

福井氏は二回目の「今月某日」を沢蘭と萱草の言葉の続きとしてみているが、筆者は風聞が御史中丞の伝聞、という匿名性をもつものであることを考慮し、それぞれ独立した文と考える。

## ③検分して再確認

臣謂、偏辭難信。敢察以情。登撰甘蕉左近杜若江離、依源弁覆。兩草各処、異列同款。既有証拠。羌非風聞。

切尋。甘蕉出自菓草、本無芬馥之香、柯条之任。非有松柏後彫之心、蓋闕葵藿傾陽之識。

馮藉慶會、稽絕倫等、而得人之蒼靡即。

称平之声寂寞、遂使言樹之草、忘愛之用莫施。無絶之芳、当門之弊斯在。妨賢敗政、孰過於此。而不除藂、憲章安用。請以見事、徙根翦葉、斥出台外。庶懲彼将来。謝此衆屈。

《これらの風聞は、一方の側に立ったものであり、鵜呑みにするわけには参りません。そこで思い切つて事実に基づいてつまびらかにすることにしました。私は台に登つて甘蕉の近くの杜若と江離をひっぱつて、根っこの所を調べてみました。両草は、生えているところこそ違つていましたが、求めているところは同じでした。

さあ、これで証拠もそろいました。うわさだけではなかったのです。

申し上げます。甘蕉は菓草で、もともとは芳しい香りもなく、枝を張つたりしませんでした。冬でも緑を保つ松柏のような志も、太陽の方を向く葵藿のような見識もありませんでした。

馮衍は忠臣であるということを印象づけようとして最初は敢えて光武帝に黜けられるという屈辱に甘んじて人々の称賛を得、仕えませんでした。また嵇康は友人等と絶交す

ることによつて人々の称賛を得、仕えませんでした。(甘蕉も彼らと同じように) 嵇君平の寂寞をよしとしました。

その結果、(寂寞という雲露をふんだんに吸い、すくすくと育つた) 甘蕉は、植えようものなら(本人だけでなく周囲の者も巻き込んで影を作り、かくて皆の) 憂いは萱草をもつてしても消すことができない程になつてしまいました。

(寂寞を声高に叫んでしたり顔で門に陣取られた上、) どぎつい臭いを門に充満させるという害を及ぼすようになってしまいました。他の賢く生きている者の邪魔をし、政治に悪影響を及ぼすこと、これよりひどいものはありません。これでも取り除かないとおっしゃるなら、きまりが何のためにあるのかわからなくなつてしまいます。

どうか事実を直視して植えかえ剪定して、台から追い払つてしまつて下さい。将来に禍根を残さないように懲らしめて下さることを願つてやみません。

ここに述べて御挨拶申し上げます。』

この段落が一番わかりにくい。前述したように、甘蕉を追放する為に書かれたはずの文章にいきなり馮衍や嵇康や嵇君平といった、隠逸と関係深い人物が出てくるからである。

この部分を抜いてしまえばこの段落もすっきりし、また

「修竹彈甘蕉文」全体も単純この上ない作品となる。しかし、筆者はこの部分にこそ沈約の本当に言いたかったことが表現され、それがわかっていることを初めてこの作品の真の価値が理解できるのではないかと考えている。

それを考えるにあたって問題にしたいのが、甘蕉の性質の変化である。本来は藥草であるはずの甘蕉が、嵇康をはじめとする者達の感化をうけると「遂<sup>かく</sup>て「賢を妨げ政を敗る」存在に變貌をとげてしまふ、という点である。

それでは、馮衍・嵇康・嚴君平にはそもそもどんな共通点があるのだろうか。馮衍は「後漢書」馮衍伝によれば、政争に巻き込まれて「門を閉ざして自ら保ち、敢へて復び親故と通ぜず」という生活を送り、「顯志賦」で「寂寞を守りて神を存せり」という心境を吐露した。嵇康は「与山巨源絶交書」で「吾、頃る養生の術を学ぶ。方に榮華を外にし、滋味を去りて、心を寂寞に游ばしめ、無為を以て貴しと為す」と言い、山濤と絶交してしまった。嚴君平は「大音は響を掩ふこと能はず」（「座右銘」）と言い、仕えたことがなく、最低限の生活費を稼ぐと「肆を閉ち簾を下して老子を授く」（「漢書」王貢兩龔鮑伝）という暮らしをしていた。つまりこの三人は、いきさつはどうであれ、寂寞を求め門を閉ざすという「荷篠之隱」的生き方をしたという点で

共通性を持ち、甘蕉は彼らの生き方をよしとした結果、「芬馥之香」を有するようになり、「柯条之任」にあたるようになってしまったという。柯は「広韻」によれば下平七歌韻で古俄切。荷も下平七歌韻で胡苛切。条は下平三蕭韻で徒聊切。篠も下平三蕭韻で吐彫切。これから考えると、柯条は明らかに荷篠の音調を意識したもので、一種の鍊字の類であろう。

では、「荷篠之隱」をよしとする人が招く「敗政」、「妨賢」といった「当門之弊」とは具体的には何をさすのか。

嵇康は、司馬昭に取り込まれることを拒み、処刑されるに至るほど時の政治権力者たちには危険人物であった。また、嚴君平は、「未だ嘗て仕えず、然れどもその風声は以て食を激し俗を厲するに足る。近古の逸民なり」（「漢書」王貢兩龔鮑伝）という人物で、

口舌者禍福之門、滅身之斧。言語者天命之属、形骸之部。出失則患入、言失則亡身。是以聖人当言而懷、發言而憂。（「座右銘」）

と、失言が招く憂いについて述べ、言語の否定的側面に注意している。仕官しなかった彼も、政治を妨害したといえる。

後漢時代、馮衍と鮑永とは更始帝の死を知らなかった為

に光武帝に降るのが遅くなった。鮑永はすぐに功績を立てて埋め合わせをした為大丈夫だったが、馮衍は黜けられてしまった。鮑永は劉邦の故事を引き合いに出して、英邁の君主は新しく臣下になる者が以前仕えていた君主に忠節を尽くしたのであれば用いてくれる、と馮衍を説得しようとした。馮衍は、楚に対して二心を抱いているのではないかと疑われた陳軫が秦王に語った譬え話を引き合いにだして、それに答える。

楚人有兩妻者。人誂其長者、詈之、誂其少者、少者許之。居無幾何、有兩妻者死。客謂誂者曰、「汝取長者乎、少者乎。」「取長者。」客曰、「長者詈汝、少者和汝。汝何為取長者。」曰、「居彼人之所、則欲其許我也。今為我妻、則欲其為我詈人也。」（「戦国策」秦策二）

前夫の生前貞節を守った妻が新夫の信用を得て再嫁したという話で、陳軫は秦王に対する忠義が確固としているからこそ自分が楚王に信頼されているのだと弁明している。馮衍がこの話をしたことについて李賢らは「後漢書」に次のように注す。

引之者、言己為故主守節、亦冀新帝重之也。（馮衍伝注）

馮衍には、敢えて身を退けることによって光武帝に自分の

節操を認めて貰おうという下心があったとするのである。馮衍のこのような打算的態度をみれば、彼が後に「顕志賦」を作り寂寞を標榜しているのが職を得る為だったことがより一層はつきりし、彼の似非隠者ぶりが鮮明になる。

なお、慶会が嘉会の鍊字だとすれば、聖主と賢臣が巡り会う得難い機会のことである。馮衍が光武帝の時代にいきあって外戚との親交があつたことをさすのだろう。ただし、彼は光武帝に重用されなかった。外戚と結んで政治を乱した彼も、やはり「当門之弊」を招いたといえる。

沈約は「宋書」隱逸伝序で、袁淑の「真隱伝」は「荷蓀之隱」を指摘した人を収めているに過ぎないと結論づけている。沈約はそういった人物を敬慕した袁淑自身をも「荷蓀之隱」の部類だと考えたであろう。袁淑は劉義康側の勢力に引き込まれそうになった時に「種蘭」詩を作り、そこで「蘭を種うるに門に当たたるを忌む」と言い「門は蘭を植うる所に非ず」と言った。そして健康上の理由をつけて官を免れた<sup>⑧</sup>。彼はこの詩で自分を蘭に譬えたのだが、沈約は袁淑の矜持を逆手にとって、「こういう人種がことにあたると弊害がある」と言い換えているかのようである。弊害として挙げられている「妨賢」は、李周翰が「賢きを妨ぐる人の路は塵汚」というように（顔延之「応詔燕曲水作」の

「三妨儲諫」文選注、賢ではない人の邪魔によって、賢人が行く手を阻まれてしまうことをいうが、これについても「宋書」に載せる袁淑に関わる次の話が参考になる。

良由内懷耿介、峻節不可輕干。袁淑笑謔之間、而王徵弔詞連牘。(王徵伝)

これは、王徵が求職の文章を書いたと言つて袁淑がからかったことについて、沈約が「王徵の節操は他人が軽々しくおかすべきものではない」と非難しているものである。王徵伝には、袁淑を「群賢を塞ぐ人物」であるとする王徵自身の書簡も載せている。理想は立派だが現状を正確に把握できなかった袁淑は木を見て森を見ないタイプの人物である。「洪図に拠れども天下を軽んず」「宋書」袁淑伝) るのは駄目だ。彼は、自分の正義(「荷篠之隱」的発想)によって政治を動かそうとし、賢人の邪魔をしているのである。

沈約は「保身の路、未だ適く候を知らず。非子を戒むるに、慎みて善を為す勿かれと。將に遠く以ある有らんとす」(「宋書」文九王伝)と、注意深くあれと善をなすことを戒め、さらに、左のようにこれみよがしに「隱」を振りかざす態度への嫌悪感を露にする。

莫不激貪厲俗、秉自異之姿、猶負掲日月、鳴建鼓而趨也。」「宋書」隱逸伝)

彼のこうした「荷篠之隱」批判が「修竹彈甘蕉文」でも矛盾なく述べられていることが、この段落を注意深く読むことによってわかる。

## 2、嵇康批判

本文にも登場する嵇康は、沈約の主張する「賢人之隱」とは全く異なった生き方をした人物である。沈約は、英邁を隠さなかった嵇康を「七賢論」で「霓衣羽帶に非ざる自りは、自ら全うするに用無し」と仙人でもない限り殺されてしまうのは当然だったとし、上智の人として表面上は評価しながら、範とするに足りないとの結論を事実上くだしている。そして「修竹彈甘蕉文」でこうした嵇康流の生真面目な考え方を笑い飛ばす。

もともとは葉草だったはずの甘蕉が、「寂寞」(「与山巨源絶交書」という「荷篠之隱」的在り方を慕った結果、鼻持ちならない臭いを発するようになって迷惑をかける。周囲の者はとうとう我慢できなくなってしまう、かくて甘蕉は本来いた場所から追い出されてしまうことになった。

「修竹彈甘蕉文」を嵇康の「養生論」の内容と比較してみると、もっとわかりやすい。「養生論」にも「修竹彈甘蕉文」にも、作物の植え方の譬えがでてくるが、「養生論」



の畑は乾燥しきって、嵇康は水のひと撒きの大切さを説く。ところが、「修竹彈甘蕉文」では湿润この上ない土地に甘蕉が育ち過ぎて弊害を招く。嵇康が「心を安んじて以て身を全うす。愛憎情に棲ましめず、……、体氣和平なり」と精神を平静に保つことによる心身の安全を言え、<sup>①</sup>「猶ほ謂へらく、愛憎説を異にす。蔽網に挂くべき所以なり」と、異端分子は除かれるべきとする。まるでその主張とは裏腹に実際には愛憎をもってしまった為に司馬昭に殺されてしまった嵇康のことを言っているかのようである。「萱草の憂ひを忘れしむるは、愚智の共に知る所なり」と嵇康が言え、沈約は「憂ひを忘れしむるの用、施す莫し」と萱草も服用者の状態如何では効き目がないことをいうし、嵇康が「芬の香たらしめて、延さしむる無からんや」と言え、沈約は「絶する無きの芳あり、当門の弊斯に在り」と、香りが強すぎて追放されてしまう甘蕉の運命を用意する。「多を以て自ら証し、同を以て自ら慰む。謂へらく、天地の理、此に尽くるのみ」と嵇康が多数意見に対する疑問を投げかければ、実地の検分に赴いて「既に証掘有り、羌<sup>すなは</sup>風聞に非ず」と、多数意見を占める風聞が正しかったことを言う。そして、嵇康が誇らかに「先覚を以て将来の覚者に語げん」（答向子期難養生論）と宣言すれ

ば、「庶はくは彼の将来を懲らさん」とやりかえす。

「修竹彈甘蕉文」では「稽絶倫等」という形で嵇康が出てくる。そこで「与山巨源絶交書」を見てみると「吾、頃る養生の術を学び、……、心を寂寞に遊ばしむ」と、嵇康が寂寞を慕っていたことがわかる。しかし、寂寞を慕う嵇康の心は「吾困<sup>ふ</sup>しみ多し」であった。まさに「修竹彈甘蕉文」の言う「平の声寂寞たるを称し、……、忘憂の用施す莫し」と符号する。嵇康は「与山巨源絶交書」においては山濤批判をしたが、その嵇康を沈約は「修竹彈甘蕉文」で事実上批判している。沈約が嵇康を、少なくとも嵇康の隠逸観を否定的に捉えていたことは、嵇康の「高士伝」をみるとより一層はつきりする。荷蓀丈人・巢父・被裘公・濮陰丈人・河上公と、沈約が「宋書」隠逸伝で批判していた隠者の殆どが、嵇康の「聖賢高士伝」（蔽可均輯「全三国文」）にも挙げられている人物なのである。

沈約が嵇康の「高士伝」を、ひいては嵇康の隠者観を批判していたことは疑いない。

### 3、袁淑・袁粲批判

沈約は「宋書」袁粲伝に、嵇康の「高士伝」に続くと袁粲が自ら況えた作品として「妙徳先生伝」を挙げている。

そこで語られる妙徳先生は「楊子の寂寞、嚴叟の沈冥」と雖も、是に過ぎざる人物であり、自分一人が志を高くもっているが為に「以て独立し難」き苦しい情況に陥っている。

一方、袁桀の叔父の袁淑にも、敬慕すべき隠者を集めた「真隱伝」がある。ところが沈約は「宋書」隱逸伝において、袁淑の「真隱伝」を名指しで批判している。袁淑が選んだ人物は隱逸者として名前が伝わっているのだから、「真を去ること遠し」、つまり沈約の言う「賢人之隱」には遠く及ばない者たちに過ぎない、というのである。

袁淑には他に「鷄九錫文」「驢山公九錫文」「大蘭王九錫文」「常山王九命文」があり、みな擬人化によって滑稽味を出している。松浦崇氏によれば、袁淑の「真隱伝」と「鷄九錫文」をはじめとする「誹諧文」は、方法こそ違うものの、憂国の士によって一貫した価値観のもとに編纂されたものである<sup>⑩</sup>。

「修竹彈甘蕉文」では植物が人間のように描かれているが、袁淑の「誹諧文」でも擬人法が用いられている。また袁桀の「妙徳先生伝」も筆者が以前考察したように、作者が妙徳先生すなわち文殊菩薩になりかわって仏典由来のエピソードを紹介した作品であり、この点から考えれば一種

の擬人法を用いているといえる<sup>⑪</sup>。

このように、袁淑の「誹諧文」・袁桀の「妙徳先生伝」と沈約の「修竹彈甘蕉文」とはともに表現の方法として擬人法を選んだ。しかし結論を先取りするというなら、出来上がった作品の主張するところは全く違っていた。袁淑・袁桀が「荷篠之隱」を称揚したのとは対照的に、沈約は「賢人之隱」を称揚したのである。

沈約が「宋書」において「一卷一人」という待遇を与えて伝をたてているのは、謝靈運・袁淑・顔延之・袁桀である<sup>⑫</sup>。このうち、文学者としての謝靈運・顔延之への評価はさておき、袁桀と袁淑への強い関心は注目値する。この二人の生き方を沈約は声高に称揚する。しかし、一見そうみせながら実は彼らの生き方に賛成しているわけではない<sup>⑬</sup>。袁桀伝で、沈約は政争に敗れて死んだ袁桀に対して「豈に所謂義は生より重からんや」といい、やはり政争に巻き込まれて死んだ袁淑についても「乃ち義は生より重きが若し」と、生が義よりも優先することを言い、彼らの生き方が沈約の目からみれば稚拙なものであったことを匂わせている。

義よりも生を重んじる沈約の姿勢は、「宋書」隱逸伝序で「荷篠之隱」よりも「賢人之隱」を重視していることに

通じる。地に足をつけて現実生活を営んでいるように見えるが心は人知れず自由の境地をさまよう、というのが沈約の求める「賢人之隠」だった。実際には官僚としてしかるべき地位を保持したまま天寿を全うする、それが大前提なのである。

袁淑も袁粲も「隠」に憧れてそれを喧伝したが、結局彼らが求めたのは「荷篠之隠」に過ぎなかった。彼らは「隠」を声高に標榜した時点で既に沈約の言う「自晦」から遊離してしまっただけ、事実「自晦」を心得ていなかったために、あまりに率直に忠義を叫んで命を落とした。

袁淑や袁粲は「誹諧文」や「妙徳先生伝」での主張と矛盾することなく、誠実に生き、死んでいった。「平之声寂寞」たるを称した二人は、「憂ひを忘るるの用施す莫」き状態に陥り「誹諧文」や「妙徳先生伝」を書いた。自分の正しさを声高に主張し、それによって「敗政」し結局殺戮されてしまう姿は、「無絶之芳」を撒き散らした揚げ句に刈り取られてしまうことになる「修竹弾甘蕉文」の甘蕉に重なるものがあると筆者は考える。袁淑は「真隠伝」や「誹諧文」を書くことによって何尚之を代表とする似非隠者を非難し、また袁粲も「妙徳先生伝」で志の低い者を非難したのだが、沈約は「修竹弾甘蕉文」において、何尚之

的人間を非難する袁淑・袁粲的人間を非難しているのである。

### おわりに

清末の譚献は「修竹弾甘蕉文」について、「寓意甚だしく顯るるは、権要聞くを樂しまざる所なり。然らば亦望みて世に趨くの士たるを知る。有道者の言に非ず」（李兆洛「駢体文鈔」卷三十一「雜文類注引」）と、沈約が権力側の人物であり、「修竹弾甘蕉文」という文章もとても「有道者」が書いたとは思えないとする評価を下している。たしかに、沈約は宋齊梁を通して体制側の人物だったし、この作品も道教の服薬者を茶化している。しかし、実際の政界においてどんな生き方をしたかによってそのまま作品の価値まで決めてしまおうとするのは安易である。そこで断罪してしまったら、この作品に対する深い読みの可能性の芽をも摘み取ることになってしまうからだ。大切なのは、沈約の価値基準（ここでは「隠」に対する考え方）がどこにあったか、そしてそれが文学作品にどのように表現されているのかを知ることではなかろうか。譚献の見解は、彼自身の価値基準を無自覚に沈約に押し付けている、という点では不当なものだといえる。

沈約にとって「隠」とは「賢人之隠」でなければならなかった。仕官しなかった嚴君平、司馬昭側へ取り込まれることを拒んで殺された嵇康、忠義の為に死んだ袁淑と袁粲、光武帝に重用されなかった馮衍。そして別稿で論じる予定の、似非隠者を弾劾したが自らは要職にあり続けた孔稚珪<sup>②</sup>。彼らの政治的立場は様々であったが、沈約にとって「荷篠之隠」を慕う「妨賢敗政」の人として同列の存在だった。沈約は伝統的な「荷篠之隠」称揚に対抗して「修竹彈甘蕉文」で彼らをからかい、否定的評価を与えられがちな「賢人之隠」を肯定的に捉える態度を表明した。大多数の知識人が実際には「賢人之隠」的に生きているという事実を考えれば、実際の生き方と作品での主張とが齟齬を来していない沈約の姿勢は一貫していると評価されるべきではなからうか。正当化だと言ってしまうとそれまでだが、彼は自分の在り方を自覚し、それを様々な表現方法を通して示そうとし続けた。その試みが歴史著述の方法を用いた「宋書」であり、論の形式を用いた「七賢論」であり、擬人法を用いた「修竹彈甘蕉文」だったのである。彼は「賢人之隠」の正当性を、堂々と主張し続けた。好き嫌いの問題は残るにしろ、この点で沈約は自分の実際の生き方と文学との双方に誠実であったと言える。

#### 注

- ① 拙稿「沈約の『八詠詩』について」（青山語文二七、一九九七年）
- ② このような沈約の隠逸論については、既に神塚淑子「沈約の隠逸思想」（日本中国学会報三一、一九七九年）と安田二郎「南北朝貴族社会の変革と道德・倫理」（東北大学文学部研究年報三四、一九八五年）とがそれぞれ思想・歴史の方面から詳述している。
- ③ 「御史許風聞論事、相承有此言、而不究所從來。以予考之、蓋自晉宋以下如此。齊沈約為御史中丞、奏彈王源曰、風聞東海王源。蘇冕会要云、故事御史台無受詞訟之例、有詞狀在門、御史採狀、有可彈者、即略其姓名、皆云風聞訪知。」（宋・洪邁「容齋四筆」卷十一御史風聞）
- ④ 福井佳夫「孔稚珪の『北山移文』について」（中京大学文学部紀要二四―三・四、一九八九年）
- ⑤ たとえば沈約の「奏彈王源」の冒頭は「給事黃門侍郎兼御史中丞吳興邑中正臣沈約稽首」であり、「肩書・兼・肩書」という構造が「修竹彈甘蕉文」と同じである。それに対し、「奏彈秘書郎蕭遙昌」の冒頭は「謹按、兼秘書郎臣蕭遙昌」といきなり「兼」がきているが、これに導かれる人物は、弾劾される側である。この例を引いてただちに「兼・肩書」という書式が弾劾される側を示すのに用いられるなどとは到底いえないが、しかし少なくとも公的な文章で人を指す場合にいきなり「兼」から始めるのは、いささか唐突な感じがする。このことから、

筆者は「四庫全書」所収の文章が「兼」の前に「渭川」の二文字を入れていることを支持する。

⑥ 注④論文。

⑦ 潘岳「西征賦」の「遭千載之嘉会」に、「文選」李善注は「聖主得賢臣頌」に曰く、上下懽然として欣を交ふは、千載に一会のみ」を引く。

⑧ 「南史」袁湛伝附載袁淑伝。なお、「太平御覧」では、「宋書」からの引用としているが、現行の「宋書」には見えない。

⑨ なお、袁淑が王徽をからかったことに對して沈約が批判を加える、という構造は、「北山移文」や後述の「真隱伝」と通じるものがある。袁淑が何尚之へのからかいとして編んだのが「真隱伝」であり、沈約は「宋書」隱逸伝でこれを批判している注⑩参照。

⑩ これについては、「沈約と山濤・王戎——『竹林の七賢』評をめぐって——」（青山語文二六、一九九六年）において考察を試みた。

⑪ 嵇氏の嵇はもともと稽であった。「又東逕嵇山北、嵇氏故居。嵇康本姓奚、会稽人也。先人自会稽遷于譙之鉅県、改為嵇氏、取稽字之上以為姓、蓋志本也」（「水經注」淮水）

⑫ 松浦崇「袁淑の『誹諧文』について」（日本中国学会報三一、一九七九年）

⑬ 拙稿「袁粲と狂泉」（中国文化五四、一九九六年）

⑭ ここでは、謝晦伝には南玄石伝と延陵蓋伝が附載されており、蔡郭伝には蔡興宗伝が附載されているという中華書局標点

本の見解に従う。王鳴盛も「十七史商榷」卷五十九の「沈約重文人」で次のように言っている。「一部宋書以一伝独為一卷者、謝靈運之外惟顏延之・袁淑・袁粲而已」

⑮ 沈約の袁粲に対するネガティブな評価に關しては、注②安田論文において詳しく論証されている。

⑯ 孔稚珪は「北山移文」で似非隱者たる周顒を批判していたが、沈約の「奏彈孔稚珪違制啓假事」を読めば、沈約は孔稚珪を「聞を干めて」隱遁しようとする似非隱者とみなしていたことがわかる。この問題に關しては別稿で論じる。

（青山学院大学大学院）